

びわこ式 スポーツコーチングの変革
 —バスケットボール女子日本代表監督 中川文一氏を
 招いての講演会報告—

佐々木直基¹⁾ 林 悠太¹⁾ 白木孝尚¹⁾ 鳥羽賢二¹⁾ 村田正夫¹⁾ 渋谷俊浩¹⁾
 植田 実¹⁾ 松田 保¹⁾

Innovation of sport coaching
 from the perspective of Biwako Seikei Sport College
 : Reporting the lecture by Fumikazu Nakagawa,

the head coach of Japan women's basketball national team

Naoki SASAKI Yuta HAYASHI Takahisa SHIRAKI Kenji TORIBA

Masao MURATA Toshihiro SHIBUTANI Minoru UEDA Tamotsu MATSUDA

Key words : sport coaching, innovation, coaching philosophy

キーワード：スポーツコーチング，変革，コーチング哲学

1. スポーツの「コーチング」が抱える課題

「コーチング」とは、スポーツ現場において、選手を強くすること、また戦術や戦略といった専門知識を伝えることと考えるのが一般的であった。例えば選手やチームを練習で鍛え、試合におけるアドバイスによって勝利をもたらすといったことである。このように「コーチング」といえば元来、競技スポーツにおける練習やトレーニングのことで捉えられていたが、現在では「競技スポーツだけでなく社会的クラブなどで行われている一般スポーツを含め、広くスポーツ全般における指導に関する領域を指す」ようになっている。また、スポーツ現場以外では1993年にWHOが健康的な日常生活を送るために必要なスキルとして「ライフスキル」を提示したのを皮切りに、日本においても人間形成への取り組みが各省庁より提唱されている

(表1)。そこでは「『スポーツ指導』を意味する動名詞」としての「コーチング」ではなく、「『人を導く』という語意で汎用され」(佐藤, 2010)、ビジネス界などにおいて、「部下の能力や機能を最大限に引き出す」(佐藤, 2010)ためのコミュニケーションの策を「コーチング」と呼んでいる。また教育界においても、文部科学省が提唱する、「生きる力」すなわち、「『教わる』という受動行為から「学ぶ」という能動行為を生起させる」(佐藤, 2010)という意味合いで、「ビジネス界における「コーチング」が援用されている」(佐藤, 2010)。つまり「コーチング」という言葉は、競技スポーツにとどまることなく、広く社会に認知されるようになっており、「体育・スポーツの有り様によっては、庇を貸して母屋を取られることが起きかねないぐらいの隆盛な状況にある」(中川, 2010)とされている。

このような状況について、佐藤(2010)は「近視眼的にいえば、『我々の研究領域の独自

1) 競技スポーツ学科

表1 各機関の人間形成への取り組み
(横山, 2009を元に筆者作成)

機関	能力要素	主な内容
WHO (1993)	ライフスキル	効果的コミュニケーション・対人関係・共感生
文部科学省 (2006)	生きる力	協調性・責任感・人間関係形成力・感性・表現力
経済産業省 (2006)	社会人基礎能力	発進力・傾聴力・柔軟性・情報把握力・規律性
厚生労働省 (2006)	就職基礎能力	コミュニケーション能力・意思疎通・協調性・自己表現力
内閣府経済諮問会議 (2006)	人間力	コミュニケーションスキル・リーダーシップ・公共心

性が希薄化される』一方で、「大局的に考えれば、スポーツ指導はスポーツ科学そのものの研究客体であることから、これはスポーツ科学全体に及ぶ問題」であり、「我々にはその解決の中核を担う責任がある」と述べ、「ビジネス・コーチングや教育コーチングと棲み分け、コーチングの概念を本来の意味に戻す潮流を起こし」、「『スポーツ指導を探究する学問体系』すなわち『コーチング学』を再考」する必要があることを述べている。

2. 本学コーチングコース教員における取り組み

前述したように一般社会における「コーチング」の現状は、ビジネスや教育といったスポーツ以外の領域での隆盛がおこっており、スポーツの現場においては危機的状況にある。そのため「スポーツ指導を探究する学問体系」の再考といったスポーツ実践の場の「コーチング」を本来の意味に戻す作業が求められている。

学問領域におけるコーチングについて関子(2010)は、「コーチング学とはスポーツ現象、運動現象、体育現象そのものを取り扱う仲間が集まり、専門知を相互に交換し合いながら、ピアレビュー(査読)を通して論文を蓄積する学問領域である」と述べており、加えて、「コーチング学の周辺に位置する学問領域の方が、学問として確固な位置を確立しており、中心に位置するはずのコーチング学は極めて不明瞭な状況にある」と指摘してい

る。また、中川(2010)は「種目別のコーチング論は比較的発達してきたと考えられるが、一般コーチング論の構築は非常に遅れている。その結果、コーチングに関する問題を議論するための共通の枠組みが欠如しており、異なる種目の研究者同士での議論や、異なる種目の研究者による共同研究をすることが困難な状況にある」と指摘している。

そこで本学のコーチングコース教員では、「びわこ式 スポーツコーチングの変革」と題し、新しいスポーツコーチングとは何たるかを明らかにすることを目的に、世界レベルや日本トップレベルの指導経験を持つ、異なる種目(サッカー、テニス、バレーボール、陸上競技、柔道、競泳、バスケットボール)の指導者が一同に介し、定期的な研究会を開催することにした。そこでは、スポーツのコーチングは、古くから選手に「できないことができるようになる」ことや「意識しなくてはできなかったことが無意識にできるようになる」といった成長や変化をもたらしてきたが、それらの多くが理論化されておらず、暗黙知のままであることに着目した。「暗黙知を形式知へ」を合い言葉に、スポーツコーチングの現場において実際に存在する数々の暗黙知を取り上げ、これらがどのような理論によって裏付けられているのかを文献や取材によって立証していく取り組みを実施している。この作業を行うことで、スポーツ現場に存在する多くの暗黙知を形式知にすることができ、スポーツやスポーツコーチングが果た

してきた役割やあるべき姿を示すことができると考えている。しかしながら論議を重ねた結果、「新しいスポーツコーチング」を明らかにしていくためには、その前提としてそもそもスポーツとはどういうものなのか（スポーツの価値や目的、歴史、変遷など）、そしてスポーツの中のコーチはどのような存在なのか（コーチ、コーチングの定義や役目など）といったことを現代的に整理する必要がある、その上で再評価することを求めることとした。そのため、本研究会では、(1) スポーツやスポーツコーチングの歴史の変遷や価値、目的などについての文献調査を行い、本来のスポーツやコーチングはどのようなものなのかを明らかにし、改めて新たな価値や意義あるいは、使命を整理する。(2) スポーツ現場に存在する暗黙知を具体的に取り上げ、それらがどのような理論によって裏付けられているのかの検証を行い、形式知へと変換させていく。(この作業は過去の文献を用いた調査とともに、必要に応じて優秀なコーチや有識者を招いての講演会や取材によって進める)といった2本の柱を同時に行いながら、定期的に共同研究者による研究会を開催し、内容についての議論、意見交換、進捗状況の報告を行っている。また成果については研究紀要および学会発表、さらには内容をテキストとして出版することを計画している。

このような取り組みは、中川(2010)が指摘する、「異なる種目の研究者による議論」や「共同研究」の難しさを克服した活動となっており、稀有な事例となり得る。また、こうして取り組みの成果を研究紀要に投稿することは、図子(2010)の示す「コーチング学」の本来あるべき取り組みに合致するものとなる。

3. バスケットボール女子日本代表監督(講演時)中川文一氏講演会

本稿では、前述した研究会の2本の柱のうちの「(2) スポーツ現場に存在する暗黙知を

具体的に取り上げ、それらがどのような理論によって裏付けられているのかの検証を行い、形式知へと変換させていく」作業として、平成23年9月27日(火)にバスケットボール女子日本代表監督中川文一氏を招いて開催した、中川文一氏の「コーチング哲学」についての講演をまとめ報告する。講演内容は、中川氏のこれまでのコーチ経験とコーチング哲学に加え、平成23年7月に行われた第24回FIBAアジア選手権大会を戦い終えて見えてきた日本代表の課題と今後の方針についてであった。具体的な項目は以下の通りである。

- (1) 専任監督の難しさ
- (2) オートドックスな戦い方の限界
- (3) 日本のオリジナルバスケットの創造
- (4) 今後に向けて

(1) 専任代表監督の難しさ

27年間シャンソン化粧品で監督をやらせて頂いて、一年間ブランクを置いて富士通という会社で丸5年間指導しました。富士通を5年間監督を務めて、3年前に日本協会の方針で、ナショナルの専任コーチということで、富士通を退職して専任でナショナルチーム監督となり、現在に至っております。

1990年から1999年まで10年間ナショナルチームを指導させて頂いて、その時はシャンソン化粧品という母体のチームがあって、代表選手の半数はシャンソンの選手だったんで、思い切ってできた経緯があるんです。要するに「コラッ」と言ってできたんですけど、今はなんというか根無し草みたいな、専任なので自分の母体のチームの選手(若干その富士通の選手は私の教え子が残っているんですがその選手以外は)、自分がリクルートして自分が育てたという感じではないので、専任というのはやっぱり難しいなという、やっぱりちょっと遠慮があるというか、すごく気になっています。遠慮しちゃうかんのですけども、やっぱり「おい、お前らー」と出来ない

ところが強さに繋がらないのかなというのを感じながらやっています。

プロであれば、所属チームとか関係ないですよ？プロ、一個人の独立体があるわけですよ。だからすごい選手を引っ張ってくるのもどうってことはないですよ。遠慮なしに「コラッ」ってできると思うんですけども、現在女子のバスケットボールに関しては、母体のチームが企業にありますから、なかなかそのチームの選手を「おいっ」ということができない。個々の選手が独立していれば「ギュッ」とこうできたかなという風には思うんですけども、そこには監督さんがいらっしゃって、企業で守られている選手なんです。リクルートも企業でやってるもんですから、それをお借りするという感覚はなかなか強く、一步控えてしまうんです。そこが一番の悩みですね。

それと練習の量。練習時間です。やはりそれぞれの企業チームによって全然違うんです。例えば1時間半で終わるチームもあれば、3時間やるチームもありますし、大変バランスが取りにくい。1990年から1999年までやったときの練習量は今とは全然違うというのを私の中ですごいもどかしさというか、感じているところが現状です。その辺が今の私の悩みです。

(2) オーソドックスな戦い方の限界

アジア選手権のビデオを見直して、特に予選の韓国戦と、準決勝の中国戦、キーとなる試合だったんで、見直している中で「その戦い方がオーソドックスかな」と思ったんです。オーソドックスがどういうことかといったら、いわゆるディフェンスをしっかりやってリバウンドを取れば速攻で崩していく。それで得点できなければナンバープレーとかパターンプレー。でも、これはもうどのチームもやることなんです。むしろほとんどのチームがそれなんです。私はずっと速攻を武器にずっとやってきたんですけども、ちょっと

と他の国より速攻が速いという程度とか。見直していて、そんなオーソドックスなもんじゃやっぱり勝てないなということを感じて、日本人が戦うためには、こんなんでいいのかなと思い始めたのです。

もともと、日本人が戦うにはどういうことかっていうのを自分の頭の中にあって、スピードだとさかんに言ってたんです。高さでなくてスピードだということを言ってるなかで、速攻だけの威力だけではだめかなという風に感じました。オーソドックスな戦い方って誰でもやることなんで、そうすると、オーソドックスな戦い方をやると、なぜかこう動きそのものが、セットオフense、セットオフenseになることがすごく多いんです。速攻以外は、そうすると、これはいわゆる身長が大きい方が基本的に勝つんです。背のあるほうが強い。だからこんなことしてたらいけないと思う。でもやってるときはね、良いナンバープレー作ってとか思うんですよ。結局、やってることはまずいなと思いました。もっとその身長のない日本人が戦うにはこれじゃいかんなと思いました。

ただ出来ているゲームはあったんです。例えばチャイニーズタイペイとの2ゲームは、日本らしい強くディフェンスで当たって、プレッシャーをしっかりとつけていくというのが出来たんです。予選の韓国戦の前半もそれは出来たんですけど、後半、続かなかつたので逆転負けしたんですが、そういう風に出来るゲームと出来ないゲームというのがすごいはっきりしていたかなと感じています。

これからの方向性というのは、日本人の戦い方はやっぱり平面で戦うしかない。しかないっていうのはちょっと言い過ぎかもしれませんが、コートをも有効利用できないかなと、前から思ってるんです。28m×15mのコートを一杯一杯使えないのかなと、コートが遊んでると思うんですね。使っていないコートが一杯あるなという風に思うんです。だからその有効利用が必要だと。ですからスピードと

運動量をもっと上げていって、コートをフルコート一杯一杯できるだけ使って戦っていく。例えばオフェンスなら、「コート一面全部使ってオフェンスだ」、ディフェンスといったら「守る最初のトップの方からずっとディフェンスのエリアだ」という考え方でいったほうが良いかなと考えています。そういう考え方はずっとあったんですけども再認識したというか、こんなことしてたらあかんと思ったのです。日本人の戦い方の原点というか、日本のチームが戦うには原点に戻ってやっぱやらなくてはいけない。いつの間にかオーソドックスな戦い方をしているなということが自分の反省の中にありますね。ですから足を使うこと、足を止めないと言うことが一番のポイントかなとビデオを見て閃いたというか再認識しました。コートをフルに使いながら躍動感のあるバスケット、足を使ったバスケット、足を使ってやると点じゃなくて躍動感が生まれる、そういうバスケットが大事なと見直してつくづくそう思いました。

ナショナルチームをやってきて、アジアで3位、世界で10位というのが私の中で定着してきているんです。前は2位までいきましたけど、でもやっぱ優勝できない。だからなんかやはり自分の中に限界がある。だからそれはやっぱオーソドックスなバスケットではなくて、観てる人が「ええ！」と思うようなことをやらないとやっぱ勝てない、普通のことやってたんではだめだなど、そういう風に思うんです。今お話ししたようなバスケットがもし展開できれば、負けるかもわからないですけども、可能性はその中にあるのかなというか、自分の殻を破るようなそういう風な切り替えが必要なんだな、普通のことをやったんでは無理でいつまでも勝てないんだなど十何年かナショナルをみさせてもらって、そういうことを自分の中で感じているんで違うことの観点から伺っていかないといけないんだなという風に思います。世界に一つしかない花っていう歌がありますが、世界

に一つしかないバスケットをやらないかなと、そういう風に今は思っています。

(3) 日本のオリジナルバスケットの創造

日本のオリジナルのバスケットを作りたいと考えていて、一つの方向性を出してあげて、次の監督さんらがそれを参考にして日本のオリジナルのバスケットはこうだということを展開できれば良いなという風に思っているところです。

先ほどお話ししたようにユニチカの尾崎先生、これは私がユニチカ宇治の頃、五年間一度も勝てなかった。すごい監督さんです。当時、世界選手権の最高位が2位、コロンビア世界選手権で2位になったんですけど、それ以外でもブラハだとかブラジルの世界選手権で5位という成績を持っておられて、モンテリオールでも5位ですね。だからすごい実績です。「世界の尾崎」だったのです。尾崎さんは歴代の中で一番の実績を持っておられるんですけども、尾崎さんがやられたなかで一番有名なのは、「忍者ディフェンス」というのがあります。バスケット界では有名な話なんですけども、忍者、日本の忍者を使って名づけたんですけども、実際それがどんなものだったかという、色んな説があったのですが、直接尾崎さんから話を聞いた人がおられて、「ある時はフルコートに出て、ある時はハーフコートから出て守る、その中でトラップを仕掛ける」、ゾーンプレスというものです。仕掛けていって変幻自在ということをおっしゃった。こういうことをしながら相手に混乱を起こさせていくという守り方をされたということがどうも正しいみたいです。

私は協会の育成の方とか、バスケット界のみんなに言うんですけど、尾崎さんがどういうことをされたのかということの伝達がないんです。直接話を聞こうとしないんです。話を聞くのは、現在のトップのコーチばかりで、過去にすごい人がおられるのでそういう人たちの話もしっかりお呼びして話を聞いた

ら？というんですが、私たちは尾崎さんが現役の時、戦ってますから、尾崎さんのすごさっていうのがわかるんですけども、今の若い人たちはたぶんわからないというか、どういう考え方でやられたのかとかですね、その辺をやっぱりお話しして頂いて検証するというようなことも出来れば、というふうに思っています。

バスケットの練習の最初って何をするかっていうと、基礎フットワークが多かった。私らの時代、今もその流れでやっているチームが多いと思いますけど、基礎フットワークは辛い、クロスステップを入れて向こう行ったり来たりですね。そういうことをアップの代わりにやっていたんで、日本のバスケットの最初の方は、結局源流は、尾崎さんのバスケットだったんです。日本のバスケットは何かと言われたら守りなんです。ディフェンスをやっていくということが主流で、その流れが基礎フットワークで練習が始まるということに繋がってんじゃないかと私は勝手に理解しているんです。それで、その流れに沿って日本は強い守りの伝統があった。ナショナルチームもそうなんです。

その流れの中で尾崎さんに勝ったのは、共同石油の中村監督、今bjリーグにいらっやいます。去年の優勝監督です。当時、私のライバルの監督だったんですけど、その方が尾崎さんのあとを引き継いで、尾崎さんを破ったのもこの方で、中村和雄さんが尾崎さんのチームを倒した。それが何年か続いて尾崎さんの時代は終わったと、私はそういうふうに理解しているんです。中村監督が最初に尾崎さんのチームを破ったチームのガードは150cm台、その次セカンドガードは162cmだったんです。その次のフォワードは165cmだったんです。それに、169cmのセンター、173cmのセンター。当然その時尾崎さんは何人か180cmの選手を持っていました。でもこの身長差でやっつけた。これはもう本当に私にとっても当時はセンセーショナル。「こん

な小さな軍団がなんで勝てるんだ」というところがあった。そのチームは、ものすごくディフェンスが強かった。この身長でもインサイドを守りました。前に守って、後ろに守って中に入れさせないように研究されたというか、尾崎さんのチームを破る技術を研究していたと思うんです。そういうふうに関して意識がすごい強かったと感じています。

私はシャンソンに行って一年目に「韓国遠征に行けよ」と言われて遠征に行きました。韓国は伝統的にバスケットの強い国で、昔は女子のバスケは国技だったんです。当時から、中学校の指導者からプロでした。日本は学校の先生で、向こうはプロコーチが教える。シャンソンに行く以前から、韓国と繋がりがありまして、よく練習に行っていたんですが、シャンソンが韓国遠征に行ったときに衝撃を受けました。国民性というのがあって、やはり強い当たりでマンツーマンするっていうのが韓国にはありますが、韓国のバスケットは変化するんです。例えばマンツーマンしたり、ゾーンしたり。ゾーンも例えば2-3のゾーンだったら、各チームで2-3のゾーンのポイントが違うんです。どういう守り方というか、それくらい本当にオーソドックスに個々のチームがアレンジしながらゾーンを守るんです。そういう変化に富むのは韓国人の国民性というか、一つのことをダーっていくことは日本人のほうが得意だと思うんですけども、そういう変化を起こして相手をくまませるといふか、そういうことは実にうまい。

それからオフェンスの技術はすごかった。特にシュート。ハンズアップして守っていてもその向こうに相手がボール持っていたらシュートなんですよ。「パッ」と構えて「パッ」と打って、それが入るといふ恐ろしさがありまして、今でも鮮明に覚えています。そういう印象からシューティングが全てだというように当時は思いました。シュートが入ること、バスケットボールってやっぱり籠入れで

すよね、最終的には、あの籠の中にどっだけ入るかなんです。それがすごい確率で入るから、バスケットってディフェンスじゃないんだなと思ったのはその時でしたね。私は帰って、オフェンシブなバスケットをやろうと思いました。尾崎さん、中村さんのディフェンシブなバスケットに対抗していこうと、オフェンシブなことを研究しながら、当時はまだ今のように情報がなくて、ドリルなんかなくて自分が作りました。パスならパス、ドライブならドライブ、ドリブルの変化だとか、自分でファンダメンタルをものすごくやりました。それでオフェンシブなことをやっていったんですけども、やっぱり尾崎さん、中村さんのチームに勝てない。これは小手先じゃいけないとその時わかって、体力を鍛えだした。

静岡に日本平というところがあるんですけど、そこに10kmコースとか走りのコースがあって、アップダウンがちょうど良いと聞いたんで、そこを走らせました。それだけではないんですけども、とにかく体力をとということで、結局体力で台頭していかないと勝てないというふうに思っていたので、練習ではオフェンスばかりやってましたから、ディフェンスでマンツーマンをきちっと作り上げる力がなかったんでゾーンでこうやってたんですけど、「これもだめだな」と思い、マンツーマンに切り替えてやっていく中で、5年目で初めて2位になって、6年目で優勝という結果をつかみました。

今でも色々なチームに対してアドバイスするときに、バツと見たときに、足の運びはどうかとか、力はどれだけかっていうのは最初に見る。それが弱いと何をしても勝てないです。だから最初に「お前んところは足がない、力がない、まずは体力つけなさい」ということをまずアドバイスしますね。それからだと思っんです。ディフェンス力は力とイコールになっていくと思うんで、気持ちをそこに乗っければ守れていく、強く守れていく。

現在はどうなっているかという、当時の

日本は守りが主体でオフェンシブな技術がなかったため、そこからそれを改革していくというふうに思って、今でこそ男女のバスケットは本当にオフェンシブになった。しかし今度は逆に守らない、今の時代は守ることは忍耐があるんで嫌がるんです。ミニバスケットがあるから技術は高くなっているけれども、結局そのオフェンスが面白い。指導者もディフェンスの練習をやらせると嫌がるから、手抜きをするんじゃないかなと。だから色々なチームを見ていても、守りの強さはないというふうに見ています。その辺が随分変わってきたなと思っているんです。

話が横道にそれましたが、尾崎さんのチームは強い当たりと速攻を持っておられて、そしてシューティングが良かったです。一対一が強かったです。シンプルなものすごい力強いバスケットをやられていた。私が今やっていきたいというバスケットを過去にやっぱり尾崎さんが作っておられるということですね。

それからもう一つは能代工業という何連覇もした高校があるんですけども、加藤廣志先生という方が、そのチームを作られたんですけど、やはり同じだった。加藤先生はゾーンプレスっていうのを採用されたんですけども、フルコートにでて2-2-1のゾーンプレスをされて、そのあとはゾーンをしてシュートを打たせてリバウンドを取って走るんですね。それを「パーッ」と繰り返すから、本当にこれもシンプルなんですね、シュートを打ったら「パーッ」とリバウンドにいくとか、そういうシンプルな大事なことを「パーッ」とやってアップダウンをしっかりやる。そういうことを私は記憶しているんですけども、こういう尾崎先生だとか加藤先生のお話し、能代工業、女子のユニチカ山崎の監督さんがこういうことをやっておられたなっていうことを、今私がやろうとしていることはある。やっぱりこういう人たちが一世を風靡した。尾崎さんがユニチカ山崎の時代の一番最盛期のビデオ、それから能代工業の戦い方、全盛

期の戦い方をもう一回見て、それを確認して、自分の方にフィードバックしたらいいかなというふうに考えています。

(4) 今後に向けて

今回、戦っていく中で攻められない、相手のディフェンスが強くて例えば韓国戦の後半、17点リードしたのを、ひっくり返されたんです。前半に最高で17点をリードしてたんですけども、それを後半逆転されました。後半の韓国の点数はすごかったです。もうひとつは得意の韓国ゾーンを攻められなかった。そのゾーンに対してはずっとこっちも準備してたんですけど、その準備したことが効かなかった。それが大きな敗因なんです。第4クォーターでやっぱり8点しか取れなかった。本当に情けない限りで、オフェンスで点を取れない時に我々よくやるのは点数取れるためにどうしようかと考える。当たり前ですね、このナンバープレーを使うとか、ここでこいつに打たそうとか、そういうふうになっていくんですよ。ただそれをしちゃうまくいくこともあるでしょうけども、一つ私が考えたのが、攻められたときディフェンスに重きを再度置いたらどうかなと思ったんです。要するに、その躍動感のある、動きのあることをしていくためには、ディフェンスをアグレッシブにしながら、オフェンスに流れを作っていくれば、攻められるんじゃないか、というふうな考え方です。どうも考えがちなのは攻められないからどうしたらいいかと考えるのは、ダメな事なんですよ、私の経験上。ディフェンスが強いときはそのままこう押されていくという感じがすごくあるんで、そこに活路を見出すには、そんなところにあるのかなと思っています。

ディフェンスをがんばることによって忍耐力とか精神力がついてそこが戦う上での大きな根っこの部分になっていってくればいいというふうに思う。「やられてもいいよ」と選手に言うと戦い方がオフェンスだけなん

で、ふわふわしちゃう、根をしっかり張るためにはそういう精神力をきちっとする。練習でも、ディフェンスの練習をしっかりして、嫌なことをやっぱり一生懸命やることをやっていたら精神力がつくというふうに考えています。

もう一つ、私は良い速攻っていうのはやっぱりディフェンスの中にあると思うんです。ですから、良いディフェンス、強いディフェンスのチームはやはり速攻も速い。オフェンスだけじゃない、良い速攻を仕掛けるには、良いディフェンスをすることが条件なんだというふうに考え、ディフェンスを強調しながらやっています。

今お話した戦い方というのは、これからまた尾崎さんや加藤先生にお会いして「どういう感覚でやられましたか？」と聞いたらそれが、答えが出てくると思うんですけど、アップダウンを使って足を使ったバスケットが自分の見たイメージの中に入っているんで、すべてがうまくいくとは思わないんですけども、そういう勉強をしながら希望というか夢というかそういうものがその中に見い出せたらという風に思っています。今まで自分がやってきた中で先の希望とか夢とかないときにはやっぱりだめですよ。人間みんなそうだと思うんですけども、やっぱりそれが見えないと、いくら指導していても私は成功しないと、だからそういうものが見えることによってそこに向かっていける。これがひょっとしたら俺のバスケットを変えてくれる。というものを見いだせることが、すごくずっと、まあ、40年くらいやっているんですけども、そういうことを見つけながら、その時その時でなんかあったんだなというふうに出れば自分としては幸せかなと思っています。

こういう話のほうが参考になるかなと思って、大体こういうことを思っているということをお話させて頂きました。以上でお話しは終わらせて頂きます。

4. 講演を終えて

本稿は、「スポーツ現場に存在する暗黙知を具体的に取り上げ、それらがどのような理論によって裏付けられているのかの検証を行い、形式知へと変換させていく」作業の一環として、バスケットボール女子日本代表監督中川文一氏を招いて開催した講演をまとめたものである。

講演では、ナショナル専任コーチの難しさとして、母体チームから選手を預かることや選手各々の代表活動以外での練習量の違いといったことがあげられた。このことについての難しさは、バスケットボールの指導者の在り方について吉井(1986)が言う、「1回でも多く、1分でも長く、その生徒(選手)に接せよ」という言葉からも察することができる。最高のチームを、最強のチームを作り上げるには、代表活動のみならず、常日頃の練習や試合における選手との関わりが重要であることは言うまでもない。アジアのライバル中国は、ナショナルチーム自体が一つのチームとなっており、選手たちは年間を通して代表チームで活動しているようである。体格的に優位に立つ、中国代表チームが常日頃からスタッフを含めた同じメンバーで活動している現状は、日本代表がアジアを勝ち抜くためには注視が必要であろう。

とはいえ他の種目の多くのナショナルチームは、その都度招集されチーム作りを行っている。活動の充実度の差はあると思うが、サッカー日本代表は男女とも目覚ましい活躍を遂げている。中川氏は、サッカーを例に挙げ、選手自体が「プロ」であり「一個人の独立体」であることが活動の充実の要因の一つと説明している。バスケットボールでは、近年「プロ契約」選手が増えてきている現状はあるものの、選手の多くが企業での社員契約の中で、少数派である「プロ契約」選手が、本来の意味での「プロ選手」としての自立がなされるまでには至っていないのかもしれない。

い。

アジアでのライバルである中国、韓国を敗るためには、専任コーチの在り方とともに、代表活動期間の調整など協会、また選手の所属チームの協力体制の強化が必要であろう。また、複数のチームから招集された選手達が限られた時間の中で強化を行う現状では、選手の「一個人の独立体」としての意識の向上も必要であろう。

また、中川氏はこれまでのナショナルコーチの経験から「オーソドックスな戦い方」の限界を示唆していた。1990年から1999年までナショナルチームを率いた際は、「取られたら取り返す」速攻を武器にアトランタオリンピックで7位まで勝ち進んだ。しかしながら近年では、1990年代に日本が武器にしていた「速攻」自体が各国のスタンダードとなり、少々速いくらいの「速攻だけの威力だけではだめ」との見解を示しており、日本独自の「オリジナルバスケット」を創造していく必要性を訴えていた。そこでは、「コートの有効利用」と称し、オフェンスにおいてもディフェンスにおいても「足を使うこと、足を止めないと言うことが一番のポイント」、「コートをフルに使いながら躍動感のあるバスケット」が日本の戦い方の「原点」であり、ここにもどる必要性を説いている。

さらに、中川氏は、「オリジナルバスケット」について、かつて日本代表を率いて世界選手権2位を誇った尾崎氏と能代工業高校を屈指の強豪校に作り上げた加藤氏の名前を挙げ、尾崎氏がかつてフルコートにわたる変幻自在なディフェンスを駆使し、「強い当たりと、速攻」を作り上げ、「シンプルなものすごい力強いバスケットをやられていた」こと、加藤氏が「フルコートでゾーンプレスを仕掛けて、そのあとはゾーンをしてシュートを打たせてリバウンドを取って走る」というシンプルで大切なことを繰り返していたことを述べ、「やっていきたいというバスケットを過去にやっぱり尾崎さんが作っておられる」と

述べ、これから目指すべき「日本のオリジナルバスケット」のヒントが過去の有名な指導者にあるのではないかと説明している。そこでは、かつての日本（日本代表）は、尾崎氏を中心に「守る」ということに関して意識が強かったことを挙げる一方で、「今でこそ男女のバスケットは本当にオフェンシブになったが、今度は逆に守らない」、「色々なチームを見てても、守りの強さはないというふうに見えています。その辺が随分変わってきたなと思っっているんです」と語り、オフェンスへの意識の移行が、ディフェンス力の低下につながってしまっていることを指摘していた。

さらに中川氏は、2011年のアジア選手権での戦いから、オフェンスが上手い出来ない場合を含めた、すべての場面において「躍動感のある、動きのあることをしていくためには、ディフェンスをアグレッシブにしながら、オフェンスに流れを作っていくければ、攻められる」と語り、「ディフェンスをがんばることによって忍耐力とか精神力がついてそこが戦う上での大きな根っこの部分になっていってこれればいいというふうに思う」とディフェンス強化、ディフェンス重視の副次的な効果も期待していた。さらに「良い速攻って言うのはやっぱりディフェンスの中にあると思うんです。ですから、良いディフェンス、強いディフェンスのチームはやはり速攻も速い。オフェンスだけじゃない、良い速攻を仕掛けるには、良いディフェンスをすることが条件なんだ」とディフェンスの重要性を再考する必要性を述べていた。

このように今回の講演において中川氏は、「日本のオリジナルバスケット」のヒントは、元来日本が中心に据えていた、「強い守り」、「守りへの意識」にあると力説した。しかし我々がさらに注目すべきは、中川氏が「私は協会の育成の方とか、バスケット界のみんなに言うんですけど、尾崎さんがどういうことをされたのかということの伝達がないんです。直接話を聞こうとしないんです。話を聞

くのは現在のトップのコーチばかりで、過去にすごい人がおられるのでそういう人たちの話もしっかりお呼びして話を聞いたら？というんですが。～中略～今の若い人たちはたぶんわからないというか、どういう考え方でやられたのかとかです。その辺をやっばりお話しして頂いて検証するというようなことも出来れば、というふうに思っっているんです」と、過去の指導者の考え方、つまり日本のバスケットボール界を支えてきた方々の考え方に今一度目を向けるべきだと指摘している点である。このことは、本研究の課題である、「(2) スポーツ現場に存在する暗黙知を具体的に取り上げ、それらがどのような理論によって裏付けられているのかの検証を行い、形式知へと変換させていく」に合致し、まさに尾崎氏や加藤氏が持ち合わせていた暗黙知を中川氏自身が形式知化して自らの指導に役立てようとしていると言える。

中川氏の指摘を援用すれば、我々が調査すべきは、現在現役で活躍されているコーチや有識者の暗黙知を探るのはもちろんのこと、そのコーチや有識者が影響を受けた先人たちにまで遡って暗黙値を探り、形式知化していかなくてはならないのではないだろうか。

本稿では、中川氏の講演を通して、日本における女子バスケットボールの抱える課題と今後の強化ポイントを知ることができた。また本研究が掲げる「スポーツコーチングの変革」を成し遂げるための重大なヒントを頂くことができた。

最後になりましたが、アジア選手権を終え、次の戦いに向け、忙しい中、貴重な時間を割いて講演して下さった、中川文一氏に心からお礼を申し上げます。中川氏の講演の中で、「今まで自分がやってきた中で先の希望とか夢とかないときにはやっぱりだめですよ。人間みんなそうだと思うんですけども、やっぱりそれが見えないと、いくら指導していても私は成功しないと、だからそういうものが見えることによってそこに向かっ

ていける。『これがひょっとしたら俺のバスケットを変えてくれる』というものを見いだせることが、まあ、40年くらいやってるんですけども、そういうことを見つけながら、その時その時でなんかあったんだなというふうに出れば自分としては幸せかなと思ってます」と最後に語られたことに「指導者としての強さ」、「指導者に欠かせないものとは何か」を感じさせて頂いた。

付記

本研究は、びわこ成蹊スポーツ大学共同研究費の助成を受けて行われた。記して謝意を表す。

引用文献

- 中川昭 (2010) 「方法学」から「コーチング学」へ。スポーツ方法学研究, 23 (2) : 95-98.
- 佐藤正伸 (2010) 「コーチング学」を再考する必要性について：テーマ設定の趣旨。スポーツ方法学研究, 23 (2) : 93-94.
- 横山勝彦・来田宣幸編 (2009) ライフスキル教育。昭和堂：京都。
- 吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書。大修館書店：東京。p. 105.
- 関子浩二 (2010) スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性。スポーツ方法学研究, 23 (2) : 99-104.

